

浜田市議会議長 原田義則様

議員名 澁谷 幹 雄



## 調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので、その結果を報告します。

### 記

1. 期 間 平成27年1月14日(水)～1月16日(金)
2. 視察先と内容
  - ① 伊勢市 「地区みらい会議」と総合振興計画について  
「笑子・幸齢のまち」への取組み
  - ② 松阪市 「まつさか郷土教育について  
友好都市協定に向けての市長との意見交換
  - ③ もくもくファーム(伊賀市)  
経営戦略と取組みについて
3. 参加者 原田義則 牛尾博美 西田清久 平石誠 道下文男 澁谷幹雄
4. 調査経費 約30,000 円
5. 調査研究活動の概要 別紙



## 伊勢市

### 「地区みらい会議」と総合振興計画について

- 「ふるさと未来づくり」推進計画—少子高齢化の進展と団塊世代の大量退職などの社会構造の変化で、受益と負担のバランスが崩れ、これまでの行政サービスを維持していくことが困難な状況、また行政は公正公平が原則なので、市民の個々の要望に対応することに限界がある  
→市民と行政がそれぞれの責任と役割を自覚し、対等な立場でまちづくりに取り組む必要性→「市民のこうしたいがまちを動かすしくみづくり」  
→住民自治の実現をめざす
- 新たな地域自治の仕組みの導入—市民による市民のための公共サービスの提供体制に移行していく→地域自治組織の設立を促し、財源を確保する→住民自治の拡大へ  
→そのために、小学校単位(24地区)に「地区みらい会議」を設置
- 「地区みらい会議」は、地区まちづくり計画を策定し、地域課題に対し行政に提言する役割を担う→運営委員会を置く→地域財政支援制度の実施—地域住民の福祉増進や地域振興に寄与するものであれば、自由に使える
- 伊勢市ふるさと未来づくり支援要綱に基づき、H17年から合同研修をスタート  
→伊勢市ふるさと未来づくり条例へ
- H20年から、職員の地域担当制度を導入  
→課長級以上が担当、70%の職員が地元を担当している、一地域に3~4人の職員配置、新任の課長は違う地域を担当する場合が多い  
→考えの説明、会議設立への助言、計画策定のための情報提供、相談  
→私たちの地域だから、私たちには、やりたいことがある！

### 「笑子・幸齢化のまち」への取組み

- 伊勢市は、伊勢神宮の式年遷宮に合わせて、20年スパンで街づくりを考える伝統がある  
→遷宮の年—1400万人の観光客、次の年1000万人の観光客
- 現在の人口12万5千人が、平成42年には、10万5千人に
- 市民アンケートによる要望事項—①公共交通の充実②中心市街地の活性化③雇用対策の充実④生活道路の整備⑤災害に備えた都市基盤づくり⑥医療費助成の充実
- 伊勢市の課題—①子どもを産み育てやすい環境づくり②超高齢社会に対応したまちづくり③集約型都市構造の促進④公共交通体系の整備⑤ポスト遷宮における産業振興及び担い手の確保⑥大災害への備え  
→小中学校の統廃合、企業誘致、中心市街地の再生、駅前再開発、バリアフリー観光、スポーツ誘客、誘客PR、国際観光都市へ、交通対策、伊勢志摩定住自立圏—3市5町の役割分担
- 伊勢市まちづくりのキーワード—①命②心③暮らし④誇りと調和⑤自立と連携
- 「子ども未来会議」の開催—子どもたちの声を聞く



伊勢市役所で、説明を受ける



伊勢市役所の前の電光掲示板の前で。この電光掲示板には、市の借金の金額が、掲示されていた

## 松阪市

「まつさか郷土教育」について

- 伝統と文化を尊重し、我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成する
  - 松阪市教育ビジョン→夢を育み未来を切り拓く松阪の人づくり
    - ① 松阪に育ったことを誇りとし、世界の人々とともに生きる子ども
    - ② 思いやりを持ち、自分らしさを発揮し、行動できる子ども
    - ③ じっくり考え、自ら表現し、学び続けようとする子ども
  - ふるさと松阪に学ぶ教育の推進→郷土の偉人に学ぶ教育推進事業  
→市内の全小学生が学習する。国語社会道徳など学習する教科を想定して作成  
教員の関心を促すための指導テキスト→指導案例・添付資料の説明
- H24年 本居宣長 副読本と教師用指導テキストを作成→小学4年生に  
H25年 松浦武四郎 副読本と教師用指導テキストを作成→小学5年生に  
H26年 蒲生氏郷 副読本と教師用指導テキストを作成→小学6年生に
- 今後は、モデル校を指定して、取組みの充実をはかる

### わくわくワーク事業

- H10年から始まった、震災後地域で子どもたちを支えようとする兵庫県の「トライやるウィーク」事業が発端
- 現在市内全中学校で実施→キャリア教育・心を育てる教育
- 自分に自身を持ってない子どもが多いので、交流を通して自分の発見を！

### 友好都市協定に向けての市長との意見交換

- 山中光茂松阪市長から、浜田市と松阪市との友好都市協定を結びたいので、浜田市議会からも市長部局への積極的な働きかけをお願いしたい、との要請があった。
- 浜田PR大使の山崎ていじ氏が、浜田の議員が松阪市へ視察に来ると知って、三重テレビのカメラマンとともに登場。山崎氏は三重テレビに自分の番組を持っているということで西田清久議員が、浜田と松阪の歴史的な交友や浜田藩主が本居宣長へ「駅鈴」を贈ったことなどの繋がりをテレビカメラの前で説明した。
- 「本居宣長記念館」吉田悦之館長から、本居宣長についての詳しい説明を受けた。宣長の直筆は、どれも非常に丁寧に書かれていたのが印象的だった。



山中光茂松阪市長を表敬訪問し、挨拶を受ける



松阪駅前「駅鈴」の前で、記念撮影

## 伊賀の里もくもく手作りファーム(伊賀市)

- 事業内容 ①農場の運営(米野菜果樹しいたけ) ②農畜産加工場の運営(ハムソーセージ地ビールパン菓子豆腐) ③食農学習施設の運営 ④直営販売店舗5店舗の運営 ⑤飲食店8店舗の運営 ⑥貸し農園の運営
- 会長社長がJAを退職して、20人弱で企業
- 年商 54億円 年間50万人来客
- もくもくファーム18億円、農業法人モクモク18億円、通販伊賀の里18億円の売上
- 通販の顧客 46500世帯
- 職員数 正職員150人 パート200人 アルバイト650人 合計1000人
- 資本家はいない、共通の夢を持つスタッフが出資し、共に考え共に助け合うことで事業推進
- 名古屋圏と関西圏から、車で一時間半
- 体験教室、のんびり学習牧場、農学舎、宿泊施設、レストラン、
- 元気な若者はいるが、利益を上げる仕組みやコツがない
- 25年前、手作りウイナー教室開催—自分たちのおもいを伝える
- 加工品の80%はスタッフがつくる
- レストランのランチは2000円、98%は女性客→ここで食べたら健康になる
- オートメーション化に走らず、雇用を確保する
- 宣伝、チラシ、コピー—手作り、デザイナー8人
- 直売所—農業の姿を売る、ものの価値を伝える、全国食育フォーラム
- 農業の新しい価値観を創造し、生活者とともに学び、新しいライフスタイル「スローライフ」を日本に定着させる



わくわくファームの入園入り口の前で。右後方に見えるのは、24人が座れる「足湯」。ウイナーや手作りパンをそれぞれお土産に

### 所感

本居宣長記念館の吉田館長に「小林秀雄の『本居宣長』に対しては、どういう評価ですか？」と尋ねてみたら、「小林の作品は、本居宣長について書かれたものの中で、最上のものだと思う。小林は、宣長が古事記を読んだように、丁寧に『古事記伝』を読んでおり、ある意味宣長が読み込んだ以上に読み込んで表現しているので、どこを開いて読んでも発見がある」というようなことを言われ、その言葉に私は感銘を受けた。

今回の視察の発端は、観光ボランティアの会で積極的な交流を続けている、創風会の牛尾博美会長から、浜田市議会の議長団として松阪市長を表敬訪問して、友好協定に向けての足場を築いてもらいたいという要請に応えるものだったのだが、私自身にもこの「本居宣長」という人物に対して思い入れがあった。

松阪市との交流と言え、必ず、「駅鈴」の話となり、「本居宣長」の話になるものだから、私は小林秀雄全集の13巻にある『本居宣長』を呼んでみようと思い立ったのである。これまで、小林が最晩年の長い年月をかけたこの大作に立ち向かうには、読む側にも相当なエネルギーを要するから、私は逃げていたのだが、そろそろ読み頃かも知れないと思ったわけだ。しかし、今もって、500ページ近いこの評論の、200ページしか読んでいない。

というのも、この『本居宣長』を読んでいくと、宣長の「もののあはれ」に出くわし、「もののあはれ」という日本人の美学は、『源氏物語』に極まるという宣長の評価にぶちあたり、『源氏物語』を読まなければ、本居宣長は理解できる筈もない、と思うに至り、『源氏物語』の現代語訳を読むというまわり道をしなければならなかったからだ。

結果的に、私は、多くの人たちが評価するような、『源氏物語』が仏蘭西心理小説を凌駕する、人類の最高峰の物語には思えなかった。確かに、後半の『宇治十帖』は優れていると思うが、前半の主人公である光源氏は何の人間的な魅力を感じないのだ。どこが「光る君」なのか、さっぱりわからないのである。これならば、ジュリアン・ソレルやアンドレイ公爵やムッシュキン、ムルソーの方が、断然魅力的な主人公なのである。さらに、トム・ソーヤーやライ麦畑のキャッチャーになると宣言した「ぼく」ほどにも魅力がないのだ。しかしながら、本居宣長は、『源氏物語』を評価し、小林秀雄が本居宣長を圧倒的に評価しているとなれば、ことはヤッカイなのである。

何故なら、小林秀雄という人は、日本の最高の文学者の一人だと、私が自分で確信しているからだ。小林の文章には、独特の省略のリズム、というようなものがある。小林は、「アリストテレス以来の、絶対的な美などは存在せず、美は相対的なものに過ぎず、それぞれの人の心が決めるものなのだ」とは言わない。

「花の美しさなどない。美しい花があるだけだ」

と、表現する。彼の表現には、イサギヨサ(潔さ)というものがある。それは、彼の生き方が潔いからだろう。彼は、中原中也の恋人だった長谷川泰子を奪い、中原を絶望させ、中原から「口惜しい人」と書かれ、中原は荷車の上に泰子の衣服や所帯道具をのせて小林のもとに届けたのだが、その行為を終生恥じ入り、「汚れちまった悲しみ」として中原を苦しめ、結局、中原は失意のうちに死に至り、小林は中原を死なせたと多くの人にののしられたにもかかわらず、一切の弁解を排除した。「死んだ中原」などいくつかのエッセイがあるだけだ。彼らの共通の友人だった、大岡昇平や河上徹太郎に中原に対する本格的な評論があることを考えれば奇異でさえあるくらいだ。

しかし、ランボーの翻訳からスタートした小林が、自分の死を控えて取組んだのが、余りに日本的な『本居宣長』であったことの意義を考えざるを得ないし、その宣長と徹底的にかかわってきた、吉田悦之館長の言葉に、ある感銘を受けざるを得なかったというわけなのだ。

伊勢市のまちづくりに対する取組みで印象に残ったのは、極めて「体系的に」進められているという点である。市民アンケート調査で、市の課題や市民の要望を把握し、「地区みらい会議」でさらに市民の声を聞き、政策のボトムアップと市長のビジョンに基づくトップダウンを融合させて、総合振興計画を式年遷宮の20年スパンで進めている。課長級の職員を、「地区みらい会議」に全員はりつけているのも素晴らしい。

松阪市においては、人口18万人の松阪の山中市長から、浜田市とぜひ友好協定を結びたい、と頭をさげられたのには驚いた。縁を大切に、交流をはからなければ、と強く感じた。「まつさか郷土教育」では、松阪の偉人に対する副読本が小学生用に作られていた。伝記だけでなく、理解を深めるような3パターンの構成になっていて、工夫を感じた。教師用のテキストは、さらに授業に役立つように2倍の内容になっており、教えやすさを考慮した気配りを感じた。

もくもくファームは、昨年8月視察した大村市の「シュシュ」の山口社長がノウハウを学んだ場所であり、テレビに何度も取り上げられている共同体である。利益や売上げ至上主義に走らず、自分たちの考え方に賛同する人たちをターゲットにする取組みは、キラキラ光っていた。

今回の会派視察の幹事は、私が努めたが、6人の参加者それぞれに、今後の議会活動に寄与する示唆に富んだ発見があった、と自負するものである。

以上